
身代わり王女の恋物語（なろう版）

みきまろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

身代わり王女の恋物語（なろう版）

【Nコード】

N9127Z

【作者名】

みきまる

【あらすじ】

故郷の村を焼かれ、生きるために国を作り王となった男と、歴史ある大国の王女として、和平のためその男に嫁ぐことになった王女との恋物語。以前グループサイトに投稿したものに、（こりずに）大幅に加筆修正したものです。ヒロインの登場は第二話からになります。

1 大陸歴五四三年、オーレリア村

「ラウル、起きな！ 朝だよ」

村の朝は早い。

夜明けとともに祖母に起こされて、ラウルは眠い目をこすりながら家の隣に建てた鳥小屋へと向かう。十数羽の鶏たちは、ラウルが来たのに気付くと、小屋の入口につめかけて騒ぎ出した。

「ほいよつと。今出してやるからな」

ひっかけるだけの錠をはずし、扉を開ける。

「うわっ」

ばさばさばさーっ

羽毛が舞う。

鶏たちはギャツギャツとけたたましい音を立てて、庭に駆け去った。

「やれやれ。」

「お、今日はたくさんあるな」

鶏たちが出て行った小屋の中には、新鮮な卵が産み落とされていた。持ってきた籠に卵を拾って入れ、小屋の掃除をする。

さらに庭で虫や草をつついていた鶏たちにえさをやり、卵を台所に置いて畑の見回りに出た。

道端に咲く、名もない野^の花。

村人が丹精込めて育てている畑の野菜は、日の光を受けてつやつやと輝いている。

その畑の向こう、柵で覆われた場所では、朝露に濡れるやわらかな草を山羊が食^はんでいる。

ラウルは村の一番外側まで来ると、村を守る防護囲いが壊れていなか、夜の間に獣に荒らされていないかななどを調べた。

そして、村の端にある両親の墓に道で摘んだ花をたむけ、祖母の待つ家へと足を向けた。

朝日に輝く、のどかな村の風景

この村に生まれて十四年。毎日見てきた景色だったが、それが永久に続くものではないことを、ラウルは知っている。戦争だ。

小国の争いから始まった戦争は、周りの国を巻き込み、だんだんと大陸全土へ広がりを見せていた。

軍備のために少しずつ税が重くなり、大人たちは徴兵される。

初めは遠い国のことと思っていたが、ラウルの住むここオーレリア村にも、少しずつ影響が出始めていた。

今はもう、15歳以上の男はいない。

年寄りと子どもだけになったこの村で、自分にできることは何か。そう考えて、彼は村の見回りを自らの日課としていた。

「おはようさん、ラウル」

もうすぐ家だ、朝飯はなんだろうと思いつきながら歩いていると、隣人に声をかけられた。

「おはよう、ダンじいさん。」

東の縄が少し緩んでたから、直しておいたよ。」

「おお、ありがとう。いつも見回りご苦労じゃの。」

最近このあたりも物騒でなあ。囲いを強化しようかと話しておる。わしらだけじゃとてもおいつかなくて、その時は手伝いを頼むよ」

「わかった。ティエリーと一緒にいくから、声かけてくれ」

「助かるわい。よろしくな」

手を振って、ダンと別れる。

家の木戸を開けたところで、今度は先ほど話に出てきたティエリーがいるのに気付いた。

「やあ、ラウル」

「よお。おはよう。こんな朝早くからどうした」

「いや……」

ラウルの家の裏にある大木の陰から出てきたティエリーは、何か言いたそうに口ごもった。

朝から待ち構えているくらいだ、よっぱどのがあったのだろうと思うが、無理に聞きだすのも悪い。

ひとまず、ラウルはダンに頼まれた件を伝えることにした。

「あのな、ダンじいさんが囲いの強化を手伝ってほしいって言うてた。

後で声がかかると思う」

「ああ、そうか。」

うん。それはいいんだ。それは……」

顎に手を当てて地面を見つめるティエリー。

明るい茶色の髪が、さらつと頬にかかる。

真つ黒で頑固な直毛のラウルの髪とは大違いだ。

違うといえば、大雑把なラウルと違い、優しげで人当たりの言いテ

イエリーは、村の女たちにとってもてた。

戦争で、若い男をとられた村の婚姻事情は深刻だ。

ラウルより一歳上ひょうの十五とはいえ、村で一番年かさの男であるティ

エリーは、すでに女たちに狙われていた。

もしかして、そっち方面の悩みだろうか。

だとしたら俺は役に立てないぞ。

妙に焦りつつも、ラウルは年上の友を気遣う。

「ティエリー？ どうした？」

「……なんでもない。心配かけてごめん。

そうだ。もうすぐ剣が打ちあがるんだ。

出来たら一番に知らせるからな」

「うん、楽しみにしてる」

手を振って、ラウルはティエリーが家に帰るのを見送る。

ティエリーの父親は、村で唯一の鍛冶職人だった。

なかなかいい腕で、時には打った剣を都に納めることもあった。

けれどこの前の冬に、その腕を買われて徴兵されてしまった。

村で剣を必要とすることはないが、鋤や鍬は使う。

壊れた農具の修理ができる人がいなくなり困った村人を見かねて、

ティエリーが見よう見まねで修理を始めた。

父親の手伝いをしたこともあったようで、その出来栄はなかなかのものだった。

すると、そのうちに剣を作ってみたと言い出した。

ティエリーは父親が残した道具や材料をかき集めて、修理や畑仕事の合間にこつこつと鍛え始めた。

そうして作った初めての一振りが、もうすぐできあがるという。

「できたら、触らせてくれるかな」

足元の枝を拾って構える。

ひゅっ

何とも頼りなげな軽い音がした。

ティエリーには自分の道がある。

俺には、村の見回りや手伝いくらいしかできないことがない。

ひゅっ

ラウルは、枝を振るう。

何度も、何度も。

胸にくすぶる思いを断ち切るように

「ラウル、どこ行っただんだい！

朝飯だよ！！」

祖母が呼ぶ声が聞こえた。

「はあい、今行く！」

ラウルは枝を放ると、祖母の待つ家に駆け戻った。

「わあああああ！！！」

ある日の夜、村に火が放たれた。
突然の出来事に、村人たちは逃げ惑った。

「うつ、こりや……何事じゃい。」

ラウル！ ラウル、どこだい！」

「おばあ、こつちだ！ 早く！ 逃げよう！！！」

ラウルも祖母の手を引いて、家を飛び出す。

事の発端は、昼間村にやってきた、見慣れぬ5人の男たちだった。
皆一様に疲れ果てた顔をして、どこの国のものかわからない、ちぐはぐな軍装に身を包んでいた。

自分たちは、戦地から逃げてきた。
どうしても家族の元に帰りたい。

一夜の宿と食べ物を恵んでほしい、と言った。
親切な村人は、快く彼らを受け入れた。

「ひやははははは！」

気楽に暮らす馬鹿どもめっ

おまえらに戦争の苦勞がわかるか！」

ところかまわず剣を振り回し、もうすぐ収穫を迎えるはずだった作物を荒らすのは、昼間子どもに会いたいと泣いた男。

他の男は、家々を回り、金目のものや食料を強奪している。

逃げながらも、ラウルは男たちの様子を目で伺う。

……一人足りない。

「きゃあああああ！」

やめてっ、やめなさい！」

「へへっ

気の強い女は嫌いじゃねえよ。

ほれ、逃げてみる。逃げてみるよ」

悲鳴を聞きつけて振り向けば、いないと思った男が見事な金髪の女の手をつかんで、引きずり回していた。

つかまれているのは、ダンの孫で今年十七歳になるアディだ。

「や、やめろ、孫に手をだすな」

「うるせえ、じじい！ 引っ込んでろ！」

どかつ

男がダンを蹴り倒す。

腹を押さえたダンは、地面に横たわって動かなくなってしまった。

「おじいちゃん！ ああ……」

「くくっ。

女あ。さっきまでの威勢はどうした。

そうさ、弱いもんは強いもんに逆らっちゃいけねえんだよなあ」

男は、下卑た笑いを顔に浮かべると、アディを物陰へと引きずって行った。

「おばあ、村の墓地まで歩けるか。
そこで待ち合わせよう」

「ラ、ラウル。
おまえ、どこへいくんだい。まさか……」

「村の人が襲われてるのに、ほっとけないだろう」

「や、やめておくれ。
アディ《あのこ》はかわいそうじゃが、おまえまでいなくなった
らわしは……」

「おばあ、後でな！」

「ラウル……！」

祖母が叫ぶ声を背中であいて、ラウルは男が消えた方向へ向かう。
途中、倒れたダンを抱き起して、手近な塀に寄りかからせる。
腹は痛そうだが、大丈夫、命に別状はなさそうだ。

「ダンじいさん！
アディのことは俺にまかせろ！
村の墓地で待っていてくれ」

「ああ、ラウル……ラウル……頼んだぞ……」

弱々しく上げられた手を、ぎゅっと強く握ってから、ラウルは駆け出した。

くそっ

あの男、どこへ行った。

近くの家の裏にはいなかった。

炎に照らされる村の中を、必死に走る。

親とはぐれた子や道端で放心している村の女などに、墓地へ向かうよう声をかけながら、武器になりそうなものを探した。

「ちっ

こんなものでもないよりましか」

落ちていた鎌を拾ったその瞬間、

「いやあああああ！！！！」

すぐそばの小屋の中から叫び声がした。

「アディ！」

夢中で目の前の木戸をけやぶる。

そこで見たのは、殴られたのだろうか、頬を腫らしつつも男を睨みつけているアディと、彼女にのしかかり、醜い尻をさらす男の姿だった。

「てめえ！ 何してやがる！」

怒りで、目の前が真っ赤に染まった気がした。

無我夢中で、手に持った鎌を力いっぱい男の肩めがけて振り下ろす。

「ぎゃあああああ！」

鎌を肩に突き刺したまま、男がもんどりうった。

その隙に、アディの手をとり引き寄せる。

「アディ、早く、こっちだ！」

大丈夫？ 何もされてない！？

「ああ、ラウル、ありがとう。まだ何も……」

がくがくと震える彼女は、それだけ言うのが精一杯の様子だった。

「よかった！ 立って、ほら」

衣服を引き裂かれ、大きく開いた胸元に上着をかけてやる。

自分より頭一つ背の高いアディの腕を肩に掛け、なんとか立たせて逃げ出そうとしていると、

「こんのくそがきがああつ

なめた真似しやがつて！！！！」

さっきの男が肩から抜いた鎌をもって、襲いかかってきた。
足元に落ちていた棒で応戦する。

「くそつ、アディ、村の墓地だ！ 村の墓地へ向かって！！」

「ラウル、だめ……」。

足に力が入らない」

いつもは強気のアディも、恐怖のため腰が抜けてしまったのか。小屋の隅に座り込んで、動けそうにない。

「くっ」

鎌の切っ先が、ラウルの首筋をかすめる。

棒の先で男の胴体突いて、少しでも自分たちから離そうとするが、だんだんと、アディ共々小屋の隅に追い詰められた。

男が鎌を振り上げる。

これまでか。

おばあ、ごめん。

アディを背中にかばって、ぎゅっと目を閉じた。

「ぐはっ」

「ラウル！」

血しぶきがとぶ。

アディがラウルの背中をつかむ。

どきりと鈍い音がして、倒れたのは アディを襲おうとしていた男のほうだった。

「大丈夫か！？」

「ティエリー！ あ……。助かった」

ラウルがほおつと長い息を吐く。

男は、背中を斜めに切られて絶命していた。
ティエリーの手には、血に濡れた一本の剣。

「それ、もしかして」

「ああ。夕方、打ちあがったんだ。

明日おまえに見せようと思ってただけど、こんなことになるなんて」

軽く振って血を払い落とし、ティエリーは剣をラウルに渡す。
そしてアディの体の下に腕を通すと、よいしょと抱き上げた。

「アディ、怖かったな」

「ティル、ティル……ううっ……」

アディは、泣きじゃくってティエリーの首にしがみつく。
ラウルはといえば、男の死を確認し小屋の外の様子を伺ってから、
ティエリーに向かって顎をしゃくった。

「生き残った人たちは村の墓地に向かつてる。
俺たちも行こう」

「ああ。

その剣はおまえが持っていてくれ。
きつと俺よりうまく使えると思う」

「ティエリー？」

「ふっ

知らないとも思ってたのか？

毎日こっさり家の裏側で素振りの練習をしていただろう。

それはおまえの剣だ。

おまえのために作っただよ」

そうだったのか。

両親が死んでから、一生懸命俺を育ててくれたおばあ。

いつも温かく声をかけてくれる人々。

俺に懐いてくれる村の子どもたち。

いつかこの手で守れるようになりたいと思っていた。

そんなラウルの想いを、友はわかっていてくれた。

「ありがとう、ティエリー。

大事にする」

「ははっ

初めて作ったからな。強度はわからないぞ。

切れ味は……。まあ、さっき見た通りだ」

絶命した男の傷口を見る。

ぱっくりと割れたそこは、黒ずんできた血の間に、白い骨をのぞか

せていた。

一撃でこの威力。

軍に徴兵されるほどの職人の息子は、確かな技を受け継いでいた。

「急ごう。みんな待ってる」

「ああ！」

ティエリーに声をかけて、小屋を出る。

剣を持つ手に力を込めて、ラウルは祖母の待つ墓地へと駆け出した。

時は流れ

「ラウル、そろそろ時間ですよ」

山積みの書類に署名を書きながら立っていたラウルに、ティエリーが声をかけた。

「……ちつ、面倒くせえな。」

がりがり頭を掻くと、勢いをつけて立ち上がる。

「あなたね、仮にも王様になったんだから、もうちょっと上品になさい」

「うるせえな。上品な王様がよけりゃ、おまえがやれ」

あの日。

村を出た二人は、一つの国を作った。

国の名は、村と同じ、オーレリア。

その執務室には、一振りの剣が飾られている。

今見れば、材質こそ良いものであれ、決してほめられた出来ではない。

装飾の一つもなく、重さのバランスもいまいちだ。

しかし、この剣がここまでの二人を支えてきた。

「ようやくこぎつけた和平ですからね。へまをしないでくださいよ」

「はっ

自分の名前くらい書けらあ」

執務室の扉が開く。

彼らの悲願が、目の前にあった。

2 大陸歴五六 年、デナーシエ

デナーシエ王国の第一王女、リュシエンヌが死んだ。
遠乗りに出かけ、飛び出してきた子兎を避けようとして落馬したのだ。

運悪く、リュシエンヌが落ちた先には、藪の影になってわからなかった崖があった。

全身を打った彼女は、そのまま亡くなってしまった。

「リュシエンヌ……。こんなことになるとは……」

デナーシエ城の地下にある、王族の墓所。

リュシエンヌの兄で、若き国王でもあるリシャールが、妹の棺を愛おしそうに撫でている。

リシャールが知らせを聞いたとき、彼は国境近くの街道にいた。
そのときはまだ、妹が怪我をしたようだ、としか聞かなかった。

怪我と聞いて思い浮かべたのは、リュシエンヌではなく、もう一人の妹リゼットだ。

今年十八になるリゼットは、何歳いくつになっても落ち着きがなく、城を抜け出してはそこに擦り傷を作って帰ってきた。

大方、今回もお忍びで出かけて足でもひねったのだろう。
そう思った。

何せ、裁縫と読書が趣味であるリュシエンヌと違い、リゼットの趣味は狩りだった。

森に分け入っては、兎や鳥を獲ってくる。

そんなことをする王女なんて、どこにもいない。

城の料理人は新鮮な食材を喜んでいたが、リシャールにとっては頭の痛い行動だった。

だから、彼は国境での仕事を終えてから城に戻った。
仕事とは、街道の安全確認である。

通常なら警備隊のものにやらせることだったが、この道は、リュシエンヌが一週間後の婚儀の日に通る道だった。
そう。

リュシエンヌは、一週間後に婚儀を控えていた。
十五年続いた戦争で大陸一の大国となったオーレリア国の若き国王と。

十五年戦争。

今ではそう呼ばれる戦争が終わって早四年。

大陸中を巻き込み、たくさんの命が落とされた。
唯一の中立国であったデナーシェも、戦争とまったく無縁でいられたわけではなかった。

リシャルたちの父、すなわち前国王は、戦争が終わるまでずっと心を痛めつづけた、やっと終結した二年後に病に倒れ、はかなくなつた。

さらに一年後には、王の後を追うように、王妃も亡くなった。
それゆえに、二十七歳という若さでリシャルが即位した。

十五年戦争の戦勝国は、戦争のさなかに建国の宣言をし、ばらばらになった国々をまとめてあつという間に力をつけた、オーレリアだった。

オーレリアは、勝利を宣言するとすぐに、敗戦国に戦争の賠償を求めた。

敗戦国は、大小合わせると二十以上にのぼった。
それらとオーレリアが個別に条約を結んでいては、どれほど無理難

題をふっかけられるかわからない。

敗戦国の国王たちは、ない知恵を絞って話し合い、結果、デナーシエを頼ってきた。

すなわち、唯一の中立国であるデナーシエが、敗戦国のまとめ役となり、オーレリアと交渉をしてくれないかと。

デナーシエに、それを引き受ける義理はなかった。

しかし、戦勝国オーレリアと敗戦国がごたごたしている間に、戦後二年がたち、父王は倒れ、いまだ落ち着かない大陸の様子に人心が荒れ始めていた。

即位したてのリシャルは、敗戦国であろうと多くの国々に貸しを作ることを目的とし、代表を引き受けた。

和平交渉の日。

使者を通じてある程度のやり取りはしていたが、リシャルは内心不安だった。

敗戦国側がこれ以上出せないと言って提示してきた金額は、賠償とするにはあまりにも安すぎた。

さらにデナーシエからは、和平の象徴として、デナーシエの王女との婚姻をあげていた。

地盤を固めたいリシャルにとっては、妹を嫁がせてでも、オーレリアとのつながりが欲しかったからだ。

そんな見え透いた手を、オーレリア側はどうとるか。

交渉の為、デナーシエ城にあらわれたオーレリアの王は、若かった。たぶん、リシャルと同じくらいの歳だ。

髪は黒。マントも黒。

引き締まった体を包む軍衣も黒で、瞳だけ真っ青だった。

気に入らない。

一目見て、リシャルはそう思った。

今は王を名乗っているが、所詮戦争のどさくさに紛れて起った王だ。どこの馬の骨かわからない。

その証拠に、言動は粗野で、上品さのかけらもない。

三百年以上の歴史をもつデナーシエの王城において、少しも委縮する様子もなく、自信に満ち溢れた表情かおをしているのも気に入らない。さらにいえば、もっと気に入らないのが、その瞳だ。

森の湖を思わせる青い瞳は、はじめは挑むようにリシャルを睨んできた。

なんだと思って睨み返したら、つぎは嘲笑するように細められた。そして最後は満足そうに、リシャルいすけを見つめてきたのだった。

こんな奴に大事な妹をやるのか。

国の為、己の治世のためとはいえ、リシャルは少し後悔した。

オーレリアの王のほうから難癖をつけてくれればいいとさえ思った。しかし、オーレリアの王は、安すぎる賠償金にさえ文句一つつけることなく、和平に調印サインをした。

そうして迎えた婚儀。

二人いる妹のうち、どちらが嫁ぐかという話になった。

すると、当然のようにリュシエンヌが自ら嫁ぐと言った。

王族の務めであるし、年も自分の方が近いから、と。

リュシエンヌは、二十二歳であった。

婚儀の準備は着々と進んだ。

あの日の連絡を聞くまでは。

「兄様、あの……」

「！」

リュシエンヌの棺の前でリシャルが物思いにふけっていると、背後から遠慮がちに声をかけられた。驚いたリシャルが振り返る。

「ああ、リズ。おまえか……」

墓所の入口には、悄然とたたずむリゼットがいた。

「ごめんなさい。お邪魔だったかな」

「いや、ちょうどいい。話がある」

「話？」

リシャルが国境から帰ってきたとき、妹たちのどちらの出迎えもなかった。

もう夜なのに城にいないのはおかしと思ったら、つきっきりで怪我人の看護をしているのだという。

そんなに酷い怪我だったのかと、リシャルは旅装を解く間もなく見舞いに行こうとした。

しかし、妹の部屋にたどり着く前に、老体をかがめて平身低頭するオズバンド侯爵に遭遇した。

オズバンド侯爵家は、デナーシェ王家に継ぐ血筋と権力を持ち、父王の代から家族ぐるみで付き合いのある男である。

なぜそんなことをするのかと聞けば、未だ誰にも秘密にしているが、王女は怪我をしたのではなく死んだのだという。

『死んだ！？ どちらが？』

そう尋ねたときのリシャルは、兄としてではなく王として頭を働かせていた。

『……リュシエン又様でございます』

『そうか……』

『^{わたくし}私がついていながら……。
誠に申し訳ありません』

遠乗りには、リシャルが国境に向けて旅立った日に、リュシエン又とリゼットで連れ立って出かけたのだという。

付き添いは、オズバンド侯爵家。

リュシエン又たちは、姉妹の最後の思い出にとオズバンド侯爵に遠乗りをねだり、オズバンド侯爵も快く引き受けて、家をあげて警護にあたったという。

しかし、事故は起こった。

『^{こたひ}此度の責任、どうとるつもりだ』

『はっ。陛下の御心のまま、どのような処分も受ける覚悟でございます』

たとえ王女たちの望みだったとしても、髪の毛一筋とて傷をつけたら大問題だ。

それどころか今回は、王女の一人が死んでしまった。

責任をとって、侯爵本人は断首。

家督を取り上げ、一族の国外追放あたりが妥当か。

『そうか。追って、沙汰を知らせる。
とりあえずは、婚儀をどうするかだな』

腕組みをし、思考をめぐらせる。
答えはすぐに出た。

『陛下……』

僭越ながら、まだ発言を許されるのであれば、方法は一つしか』

『わかつている。それしか方法は、ない』

和平の調印では、“デナーシエの王女”としか約束しなかった。
しかし、そのあとリュシエンヌの絵姿を、オーレリア側に送ってしまっていた。

国同士の婚姻では、盛大な披露宴やパレードが行われることが恒例だ。

その際に、花嫁の髪の色や瞳の色に合わせて、調度品や花が選ばれる。
リュシエンヌの髪は黒。リゼットの髪は栗色だった。

さらに婚儀一週間前ともなれば、互いの名前入りの記念品なども作られているはずだった。

いまさら、下の妹が嫁ぎますとは言いにくい。

『リゼットを、リュシエンヌの身代わりとして嫁がせよう』

「兄様？ あの、話って？」

「ああ。」

リス、一週間後、おまえが第一王女としてオーレリアに嫁げ」

「……！」

リュシエンヌの棺の前。

そう告げた兄に、リゼットは驚く。

「それは、姉様のふりをしてってこと？」

「そうだ」

兄の言葉にリゼットが戸惑ったのは一瞬だった。すぐにこくりとわずく。

いくらおてんばとはいえ、リゼットもデナーシェの王女だ。ある程度予想をしていたのだろう。

もしかしたら、リシャルが帰ってくるまでに、オズバンド侯爵と話をしていたのかもしれない。

「急な話で悪いな」

「ううん。私も王女だもん。」

この婚儀がどれくらい大事なものはわかってるつもり。でも、もしあちらの方に気づかれたら……」

「そこはおまえ次第だ。うまくやってくれ」

「……わかった」

けなげに微笑む妹を抱き寄せる。
胸の前で合された両手が、わずかに震えていた。

「リズは、リュシイが落ちたところを見たのかい？」

髪を撫でながら聞く。

昨日の夜、城に着いてすぐにオズバンドに遭った。

その後は対策に追われ、妹^{リス}の顔を見たのは今が初めてだった。

彼女はリシャルがリュシエンヌの死をどうするかを決めるまで、城の奥に身を隠していたのだ。

リュシエンヌの死を隠し、リゼットの存在を隠し、王が戻るまで待った。

オズバンドの采配だった。

「私、姉様の前を走っていたの。

悲鳴が聞こえて、慌てて戻ったときには、姉様も、姉様の馬の姿もなかったわ。

オズバンド侯爵様が駆けつけて、みんなで見つけたときには、もう……」

「そうか。このことを知っているのは、リズとオズバンドと、オズバンド家の従者だけだったな」

「うん。

あの、オズバンド侯爵様はどうなるの？ 遠乗りについてきてくれた従者たちは？」

兄様、まさか口封じなんてしないわよね？

私が、私が悪いの。

姉様を遠乗りになんて誘ったから……」

遠乗りは、リズが言い出したことだったのか。

肩を震わせ、涙を流す妹を抱きながら、リシャルは得心がいった。さして好みでもないのに、この大事なときに遠乗りにでかけたリュシエンヌ。

よりによってリシャルがいなくなるときに出かけたのは、普段リゼットの奔放ぶりにいい顔をしていなかったからか。

姉と遠乗りなんて、リシャルに言ったら許してくれないと思ったのかもしれない。

でも、どうしても最後の思い出に行きたい。

オズバンドは、そんなリゼットの心情を察して、付き添いを引き受けた。

陽光の下、^{もと}楽しそうに馬を走らせる二人を、年老いた侯爵は微笑みながら見つめていたことだろう。

こんなことにさえならなければ、姉妹のいい記念になったはずだった。

「処罰は、まだ考え中だ。

しかし他の貴族の手前もあるから、そう軽いものにはできないな」

「……そう。そうよね……。ああ……」

苦しそうに息を吐くリゼットを、リシャルは優しく撫でる。

ふわふわの綿毛のような髪と妹のぬくもりが、少しずつ彼の心に兄としての悲しみを呼び起こした。

「リュシエンヌ……」。

死んでしまったのか」

「……」

リシャルはリゼットを離すと、そつとリュシエンヌの棺に手を掛けた。

「まだ、顔を見てやっていなかったな」

「あ！」

ぎしつと蓋をあけようとして、釘が打たれているのに気付いた。

「なんだ？ どうしてもう封じてある？」

通常、埋葬までは開くようにしてあるはずだが」

「あの、兄様。

実は姉様のお顔は、崖から落ちた衝撃で酷く腫れてしまっていて……。

私が、そうしてくれるようお願いしたの。

みんなに、一番きれいなお顔で覚えていてほしいと思ったから」

そんなに酷いのか。

見れば、釘がしてあったのは上半身だけで、蓋の途中に切れ目が入れてあり、下半分は開くようになっていた。

リゼットとの懇願を受け、リシャルは足元だけを確認する。

見覚えのあるドレス。

リュシエンヌが気に入ってよく着ていたものだ。

そのまわりには、彼女が好きだった花が敷き詰められていた。

利発で、しっかり者だったリュシエンヌ。

若くして即位した兄を、いつも励まし支えてくれていた。

あふれそうになる涙を、ぐっとこらえる。
泣いている場合ではない。

「リズ。もう一つ頼みがある」

「はい」

「リズは”リュシエンヌ”としてオーレリアに嫁ぐ。
そして”リゼット”は……リュシエンヌの代わりに死んでくれ」

「……はい」

兄と共に墓所を出て、リゼットはリュシエンヌの部屋に行く。

これからは、リゼットがリュシエンヌとして過ごすためだ。

扉を閉めると、ほおつと息をついて、革張りの白いソファに身を沈めた。

もうすぐリシャルがリゼットの死を発表する。

遠乗りにでかけて怪我をしたのはリゼットだ。

怪我が悪化して、死んだのもリゼット。

第二王女は死んだことにして、六日後には予定通り第一王女リュシエンヌが嫁ぐ。

「お疲れ様です、リゼット様。

リシャル様のご様子はいかがでしたか」

「ユリア……」

最も信頼のおける侍女が差し出したお茶を、身を起こして受け取る。
薫り高いお茶は、疲れた心をふんわりと溶かしてくれた。

「リゼットではなくて、リュシエンヌよ。」

これからは、私のことはリュシエンヌと呼んでちょうだい」

「あ、はい。申し訳ありません」

ユリアはリゼットたちの乳母の娘であり、幼いころから共にそだった乳兄弟である。

リゼットにとっては、いつも自分の幸せを願ってくれる、優しくも頼もしい、もう一人の姉であった。

もちろん、隠し事など何一つできない。

そう、隠し事なんて……。

「兄様、泣いてたわ。」

涙こそ見せなかったけど、あれは絶対泣いてた。

兄様に…… 本当のことを言っておげられたらいいのに」

「リゼ……リュシエンヌ様。」

それは……」

3 リュシエンヌの私室にて

兄様に、全て言ってしまったらいいのに。
涙をこらえる兄様を見るのは、本当に辛い。
そして兄様が棺に手をかけたとき……。
あのかきはとても焦った。

リゼットは、ユリアが淹れてくれたお茶を両手で挟むように持って、
物思いにふける。

思い起こせば一週間前。
姉の部屋を訪ねたときから、すべては始まった

ことん

と、何か音がした気がして、リゼットは夜更けに目が覚めた。
永世中立国を宣言し、調和と質素を重んじるデナーシエ国において、
国王の住まいたる王城もさして大きいものではない。
物音は隣のリュシエンヌの部屋から聞こえてきたようだった。

婚儀を二週間後に控え、姉様も眠れないのかもしれない。

そう思ったリゼットは、上着をはおって寝台から出る。

主が起きたした気配を察してか、侍女の一人が手に明かりを持って
扉を開けた。

『一人で大丈夫。姉様の部屋に行くだけだから』

蠟燭の明かりがなくとも、満月に近い今夜は月明りで十分に明るい。

手燭を断つて姉の部屋の前までくると、ぼそぼそと中から声が聞えた。

ん？ 姉様は一人ではないのかしら。

月はもうすぐ真上^{あね}にのぼる。

こんな夜更けに王女の私室に訪れる者が、自分以外にいるのだろうか。

こんこん

控えめに扉を叩く。

息を飲むような気配がしたのは気のせいか。

『姉様、リズです。リゼットです』

『……リズ……』

やはり、リュシエンヌは起きていた。

扉の間から顔を覗かせ、辺りをうかがうようにする。

『眠れなくて。

ちよつと話してもいい？』

小さいころは、怖い夢を見たといつてはリュシエンヌの寢所に潜り込んでいた。

最近はあまりなかったことだが、もうすぐ姉がいなくなると思うと無性に甘えたかった。

『リズ……そうね。』

私も話したいことがあるわ。入って』

リュシエンヌは一瞬迷った後、扉を細く開けて妹を招き入れた。そして、後ろ手で扉の鍵をかけた。そんなことは今までしたことがなかったので、リゼットは驚いて姉を振り返る。

『リズ……あなたもう気付いているんでしょう？
昔から勘が良かったものね』

『気付いて？　って、え？　何を？』

リュシエンヌは、一人納得してしつとりと微笑む。

リゼットは何が何やらよくわからないが、姉には何か隠し事があったらしい。

『マルス様、出てらして。妹のリゼットよ』

リュシエンヌは、リゼットの肩越しに室内へと呼びかけた。すると続き部屋の陰から、一人の男性が現れた。部屋の中央まで来ると片膝をついて、リゼットの前で優雅に礼をする。

『……お初にお目にかかります。
オズバンド侯爵家長男、マルスッドウゝヴィアゝオズバンドと申します』

そう名乗ったのは、淡い金髪が色素の薄い顔を覆う、線の細い男性だった。

マルスッドウゝヴィアゝオズバンド。

聞き覚えのあるその名に、リゼットは記憶をたどる。

確か幼いころの、姉の許嫁ではなかったか。

戦乱の中、いつのまにか立ち消えてしまったと思ったけれど。

『リズ。私が二週間後に嫁ぐことはわかっているわ。

だから今だけ、わがママを許してちょうだい』

『姉様』

リュシエンヌが、目線でマルス様に立つよう促す。

マルスはリュシエンヌの手をとると、手の甲に唇を寄せて口づけた。嬉しそうに微笑むリュシエンヌ。

その顔は、デナーシエの第一王女ではなく、一人の恋する女性だった。

ああ、そうか。

許嫁ではなくなったとしても、2人はどこかで出会ったのだ。

そして惹かれあつたのだろう。

戦争さえなければ、誰もが祝福する2人としてそのまま幸せになることもあつたらうに。

『わかった。今夜見たことは誰にもいわない。

でも姉様、それでいいの？好きな人がいるのに、お嫁に行つち

やつて、本当にいいの……？』

リゼットの純粋な問いかけに、リュシエンヌとマルスは目と目を合わせて淡く微笑む。

『私も、王族の義務はよくわかっているわ。周辺国との婚姻と不思議の力で、私たちの国は中立国を守ってこられたのだから。出発の

日までに気持ちの整理はつけるわ』

目の奥に強い意志を感じさせて言い切るリュシエンヌは、今はまた王女の顔をしていた。

そう、デナーシェが戦乱の中、中立を保ってこられたのは、長い歴史の中でうまく諸国にまぎれこませてきたデナーシェの血と、長い間護りに心血をそそいできた結果得た（といわれている）不思議の力によるものだった。

でも、恋する心はそんなに簡単に整理などつくものなのだろうか。恋を知らない私には想像もつかないのだけれど……。

納得のいかないリゼットは、さらに姉に問う。

『本当にいいの？』

リュシエンヌとがうなずき、隣に寄り添う恋人がせつなげに口を開く。

『元々は私の一方的な想いだったのです。それをリュシエンヌ様に受け入れていただけただけでも 身に余る光栄。これ以上何を望むというのでしょうか。』

今夜ここを訪れたのも最後のお別れをさせていただくためです』

そうは言っても、からめあう手と手が二人の思いを如実に語っていた。

また、いつも側に控えているはずのリュシエンヌ付きの侍女の姿も見えないことから、姉の意志で彼を招いたことは明白だった。

『マルス様、私のほうこそごめんなさい。』

あのとときあなたの手をとらなければ、こんなに苦しめることはなかったのに』

リュシエンヌ様……と、マルスの口が動いた。
しかし声にはならず、次の瞬間、彼の体がぐらりとかしいだ。

『マルス様……！』

リュシエンヌが、悲鳴に似た声で恋人の名を呼ぶ。
右膝をつき、肩で荒く息をするマルスは、苦しそうに胸元を押さえ
ていた。

『だ、大丈夫です。いつもの発作ですから。
それよりそろそろ戻らないと侍女達もしびれを切らしているでし
よう。』

これ以上あなたにご迷惑をおかけするわけにはいきません』

マルスは慣れた手つきで上着の隠しから薬を取り出し、口に入れた。
水差しを取ろうとする姉を制して、リゼットが水を注いでマルスに
渡す。

リュシエンヌは心配そうに眉根を寄せて、マルスの背中をさすって
いた。

『姉様、彼は一体……』

水差しを戻して姉の顔を伺う。

リュシエンヌは、ゆるゆると首を左右に振って、何も答えなかった。
月明りが、冷や汗をかくマルスの横顔を照らす。
元々白かった顔色は、今は蒼白とっていいほどになっていた。

『リゼット様……私の命はあともって半年と医師に言われています。どうせ死ぬのならと思いを告げた私を、リュシエンヌ様は受け入れてくださったのです。』

大丈夫。もうすぐ死ぬ身ですから、リュシエンヌ様の思いが残るはずありません。

リュシエンヌ様、あなたなら素晴らしい王妃となられることでしょう。

静養先の別荘で、あなたのご活躍をお祈りしています。』

薬が効いたのか、少し顔色のよくなったマルスは立ち上がって姉様の手に口づけた。

リュシエンヌが旅立つ前日に、彼も別荘に行くのだという。

恋人が、違う男と結婚するために出かけるのを見送るのはつらいのだろう。

『マルス様。ああ……。』

なぜそんなことをおっしゃるの？

私は同情であなたと過ごしていたわけではないわ。

あなたの死を側で待つなんて耐えられない。

だからこそ、今回の婚姻を受けたのよ。

私は皆が思うような強い女じゃないわ。

あなたの死を乗り越えられる自信がないから、他の国へ逃げようとした卑怯な女なのよ！』

『リュシエンヌ様……！』

強く抱き合いお互いの名を呼ぶ2人。

そう、嫁ぐのは別にリゼットでもよいのだ。

それを、リュシエンヌは年齢的にも釣り合つのは自分だといって、進んで嫁ごうとしていた。

その裏にこんなことがあったとは、リゼットは想像もしていなかった。

いつも落ち着いていて、しっかり者の姉。

その姉が、男性の胸にすがって泣いている。

リゼットは、それほどまでに焦がれる相手に出会えたことを、うらやましく思った。

だから、つい、こう口にした。

『姉様、オーレリアには私が行く。姉様はマルス様と一緒にいてあげて』

言葉にした瞬間、リゼットはこの思いつきがとてもいいもののように思えた。

和平の条件はデナーシェの王女がオーレリアの王に嫁ぐということだと聞いている。

リュシエンヌが指名されたわけではない。

『リゼット！ 何を言っているの！』

驚きながらもリュシエンヌの瞳が揺らぐ。

きつと、本当は迷っていたのだ。

最後まで共にありたいと思う心と、最後を看取することを恐れる心。

今までは国の為という建前で、自分をだましてきた。

『大丈夫、うまくやるよ。』

……いえ、うまくやるわ』

あわてて言い直した。

今まで兄と姉の保護のおかげで自由気ままに育ってきたリゼットは、言葉遣いもまだ幼い……というより荒い。

公式の間ではそれなりに取り繕ってはいるが。

『だ、だめよ。』

私の絵姿はもうオーレリアに渡っているし、お兄様だって、こんなこと許すわけないわ』

リュシエンヌの髪は、腰まで届くつややかな黒。

リゼットの髪は、栗色だ。

湿気が多いと、自然とくるくるとうねってしまう猫っ毛が悩みの種で、長いとすぐにからまってしまうため、いつも結い上げられるぎりぎりまで切ってしまったている。

姉のまつすぐな黒髪があこがれだった。

瞳の色は同じ榛色。

光の加減で黄色く輝くのが王家の証である。

『髪は染めればなんとかなる。

猫っ毛だって、いつも結っていればわからないし。

童顔は……うーん、お化粧すればいいかな。

ユリアならきっと大丈夫よ』

ユリアは、姉の婚姻に合わせて、オーレリアについていくことになっていた。

お茶を淹れるのもうまいが、化粧も抜群にうまい。

オーレリアに向かうのは、リュシエンヌとユリアだけの予定であった。

あまりにも心細いのだと思ったが、和平の条件でもあったようだ。婚姻にかこつけて大人数を送り込まれては都合が悪いのだろう。

『リゼット……』

妹の言葉に背中を押され、リュシエンヌは心を決めたようだ。

『ごめんなさい。私がもっと早く話していれば、そんな苦勞を背負わずにすんだのに』

リュシエンヌがあえて今夜リゼットを招き入れたのは、自分が嫁いだ後、マルスの様子を時々知らせてほしいと頼むためだった。ところがリゼットの予想外の申し出に、とんだ方向に話が進んだ。

『姉様、それは違う。』

間に合ってよかった、と言つのよ』

片目をつぶりながら明るく言うリゼットに、リュシエンヌとマルスは顔を見合わせて、そっと微笑んだ。

「リゼット様、おきれいですわあ……」

ほう、と見惚れるようにため息をつくのはユリア。

リゼットの死を発表してからの日々は、あっという間に過ぎた。

今日はもうオーレリアに向けて出発する日。

数時間後の出発を控え、髪を染め、正式な身支度を整えた。

ユリアの手による濃いめの化粧をし、ゆったりと微笑む鏡の中の女性性は、自分でも驚くほどに姉にそっくりだった。

「だから、リュシエンヌだって」

「あら、すみません」

あの夜のあと、ユリアに事情を話すると、激しく怒った上で協力を申し出てくれた。

怒りの方向は、主にそれまで秘密にしていたリュシエンヌとマルスの関係にあるようだったが。

「リゼット様がリュシエンヌ様の振りをするなんて、

子猿が人のマネをするようなものと思いますが、なんとかなるもんですね。

いえ失礼、たんぽぽが薔薇になりたがるようなものかしら、それとも、亀が月を目指すような……」

「ユリア……」

どんどん例えが酷くなる侍女の言葉に、リゼットはつい半目になってにらんでしまう。

そりゃ、私は姉様とは比べ物にならないくらい、所作も言葉づかいも乱暴だけれども。

お裁縫と読書を趣味とする姉様と、本なんてほとんど読まず、野を駆け回り、兄の目を盗んでは狩りに出かける私だけれども。

いじいじいじ。

耳の横に一筋だけ垂らした髪を、つまんですねる。

「あら、いけませんわ、リゼット様。

リュシエンヌ様ならこんなとき、こうおっしゃいますわ。

『猿もたんぽぽも亀もそのものにしかない美しさがあるわ。』

自然が作ったものに優劣をつけようなんて、人だけがもつ卑しさ

よ。

自然を前にしたら私なんて道端の石ころにも満たない小さな存在だわ』ってね」

……姉様が石ころなら、私は砂粒だ。

リュシエンヌはさらに自信をなくす。

あの夜は、とてもいい思いつきに思えた。

しかし、美貌と知性とを兼ね備え、国民の信を一身に受けていたりユシエンヌの代わりである。

本当に自分に務まるのだろうか。

いやいや、大丈夫。

だってオーレリアの王はリュシエンヌに直接会ったことはないのだ。絵姿しか知らないのならばれることもあるまい。

リゼットだってデナーシェの姫であることには間違いはないのだから。

「姉様、私、がんばるわ」

鏡の中の自分に話しかける。

化粧をし、リュシエンヌそっくりになった自分が微笑むと、姉に励まされたような気がした。

姉はきつと今ごろマルス様と2人で幸せな時を過ごしているだろう。残されたわずかな時間でしかないとしても、その幸せを自分が守っていると思うと誇らしい気持ちになる。

鏡の前で百面相をしていたら、扉が控えめにノックされて、リシャルが来たことが告げられた。

他国に嫁ぐ妹を見送るリシャルも、今日は正装だ。

王になりたてのころは、なんとなく恰好がつかなかった重そうなマ

ントや王冠も、すっかり板について堂々たるものだった。

「リゼット……いや、リュシエンヌ。

とてもきれいだよ。どこに出しても恥ずかしくない、我が国一番の姫君だ」

リシャルが、リゼットの肩を励ますようにたたく。

“リゼット”は死に、すでにあの棺に名が刻まれていた。

兄に名を呼ばれたことで、リゼットは、とうとう自分はリュシエンヌとなるのだと実感する。

わかってはいはいたけれど、覚悟はしていたけれど、リゼットにも一っだけ後悔していることがあった。

それは、名前だ。

これからリゼットは、リュシエンヌとして生きていく。

“リゼット”という名は、もう一生名乗ることはない。

“リゼット”。

亡き両親がつけてくれた、私の名前。

兄の手をとり、露台へと足を運ぶ。

わあ、と国民の歓声があがる。

リゼットの死を知り、嘆いてくれた国民たち。

婚儀の前なので、大がかりな葬儀は行われなかった。

しかしそれぞれの家の前には黒い布が掲げられ、弔意を示してくれた。

今はリュシエンヌの旅立ちを祝福してくれている。

例えばそれが政略結婚であれ、幸せなものになるように。

リゼット　いや、リュシエンヌが手を振ると、ひととき大きな歓声があがった。

我らが自慢の姫君を称えて歓声は大きなうねりとなり、国中を包んだ。

この国と民のために。

兄様、姉様のために。

オーレリア
新しい国でがんばろう。

花びらが舞う中、露台を降りて馬車に乗り込む。

中には、すでにユリアが準備万端整えて待っていてくれた。

「リュシエンヌ。元気で」

「兄様も」

馬車が走り出す。

人々の歓声を受けながら、王女は祖国を後にした。

4 追憶

和平の調印から二年。
男は、馬上にいた。

「ああ、面倒くせえ」

何度目だろう。またつぶやいてしまった。
今日はデナーシェからの花嫁を迎えに行く日だった。
この俺に花嫁だと。はっ、ちゃんちゃらおかしいな。

オーレリア国王、ラウル〃オーレリアは、馬を走らせデナーシェとの国境に向かう。

そこでデナーシェからの警備兵とオーレリアからの警備兵で引継ぎが行われ、王女は侍女一人だけを連れてオーレリアに嫁いでくることになっている。

本当なら、ラウルも仰々しい馬車に乗って王女を迎えに来るのが礼儀だったが、そんな面倒なことはしたくないと、騎馬で駆けてきた。

「あれから、もう十七年か……」

五人の男に村を焼かれたラウルたちは、ここを立て直すのはもう無理だと判断して、村を捨てることにした。

村を出て、初めに頼ったのは税を納めていた領主の元だった。

ラウルとティエリーが先頭に立ち、村人を引き連れてようやくどり着いた館は、もぬけの殻だった。

荒らされた室内。

ところどころ焦げた跡がある。ここも焼かれたのだろう。

不安におびえながらも、村人同士で肩を寄せ合って領主の館で一晩明かした。

朝になり、長老を中心に、これからどうするか話し合った。

大陸全土に広がりつつある戦争。

どこまで行っても同じような状況だろう。

それならいっそ、大陸の北にある、永世中立国デナーシェに助けを求めてはどうか。

皆の意見が一致した。

デナーシェは遠かった。

途中の被害の少ない村々で、労働と引き換えに小さな子どもを預かってもらうこともあった。

どの村も男手は少なかったから、ラウルやティエリーは歓迎された。村でしていたように、柵を補強したり井戸を直したりした。

ティエリーの鍛冶技術は、どこでも重宝された。

立ち寄った村で強く引き留められたこともあったが、たいていは若い衆だけで、故郷の村人全部を引き受けてくれるところはなかった。

オーレリア村の人々は、デナーシェを目指す。

野宿をすることも多かった。

山の中で力尽きた年寄りらは、仕方なくその場に埋めた。

村を出て数年がたち、ラウルは傭兵、ティエリーは商人の真似事をして、人々の生活を支えた。

その頃には、一緒に来る村人もずいぶん少なくなっていた。

旅の間に、アディが子どもを産んだ。

ティエリーの子だという。

『おまえらいつのまに?』

『いや、まあ、なんというか……』

『うふん、ティルったら照れちゃって』

ティエリーは母子をどこか安全なところに落ち着かせようと思ったが、アディは絶対についていくと言って譲らなかった。

彼女は持ち前の気の強さで、誰に頼ることなく赤子を守りきった。

結果的に、デナーシエはオーレリア村の人々を受け入れなかった。ラウルは、あのと時の悔しさをいまでも忘れられない。固く閉ざされた門。

同じようにデナーシエを頼ってきた人々で、城下町を取り囲む高い塀の周りは埋め尽くされていた。

『おばあ、ごめん……』

『いいんだよ、ラウル。』

ここに来るって目的があったから、わしらは今まで生きてこれた。もうおまえも自由におなり。

わしらの面倒をみることはないんじゃない?』

デナーシエの塀際で、むしろを敷いて過ごして5日目。

ラウルの祖母は、息を引き取った。

彼は誓った。

絶対この国を見返してやる。

自分たちの都合で戦争を起こし、俺たちを、村人をこんな目にあわせた奴らに復讐してやる……！

ラウルはティエリーと相談して、村からついてきた比較的年長の子どもたちと、デナーシエの城壁前で会った有志で傭兵団を作った。団長はラウルで、武器の調達や渉外などの細々したことはティエリーが受け持った。

アディは食料や生活物資などのまとめ役を担当した。

三人で力を合わせて、ひたすら生きるために戦った。

『ラウル。』

一介の傭兵団としてまとまるには、この団は大きくなりすぎました。

『国を作りましょう』

金銭の交渉をする際、若いと馬鹿にされるといって、いつのまにかティエリーはそんな話し方をするようになった。

眼鏡をかけ、落着いた物腰で話すティエリーは、年齢不詳でとても胡散臭い感じがする。

ある日、ラウルが冗談交じりにそう指摘したら、親友はこう言った。

『あなただって、あのかわいかった面影は全然ありませんよ。』

まったく、こんな筋肉ばかりついて。

少しは頭の中も鍛えなさいね』

『うるせえよ』

戦争のごたごたで、国の名乗りをあげるのは簡単だった。

国の名前はオーレリア。

故郷の村の名前だった。

どこかの国が放棄した城を根城にして、周辺の国を攻めていく。少しずつ大きくなっていった国には、助けを求める人々が集まるようになった。

ラウルたちは、その人々をすべて受け入れた。

デナーシェのように切り捨てることはしなかった。

治安や食料のことなど、人が増えるほどに問題も増えて行ったが、いつでも手を取り合って乗り切ってきた。

お互いをわかりあえる、一番の親友。

オーレリアの王と宰相という立場になっても、それは変わらない。国が落ち着くと、アディは城下町に孤児院を作った。

ラウルは、孤児院は人に任せて何か役職を、と言ったが、

『そんな柄じゃないわん。

私は私にしかできないことをやるから、あなたたちはあなたたちでがんばりなさい』

そう言って笑った。

大陸歴五五六年に、十五年続いた戦争が終わった。

オーレリアは、気付けば戦勝国と呼ばれていた。

気に入らない貴族や、民を守らない領主の治める土地を片っ端からつぶしていった結果だった。

ラウルたちを見捨てた領主への復讐も、きっちり果たした。あとはデナーシェだった。

どうしてくれようかと思っていた矢先に、和平の申し出があった。大陸の平和のため、諸国と手を結んで協定を結ぼうと。

冗談じゃない。

ティエリーは本気で和平を望んでいたが、ラウルは違った。

乗り気と見せかけてこっぴどく断り、恥をかかせてやろうと思った。もしくは、馬鹿高い賠償金をふっかけて、溜飲を下げようと思った。戦装束に身を固めて訪れたデナーシェの王城。

あのとき固く閉じられていた門は、大陸一の新興国の王という立場を手に入れたラウルの前で、あっけなく開いた。

同じくらいの年だろうか。

虫も殺したことがないような、きれいな顔をしたデナーシェの王は、和平の証しに妹を差し出すと言った。

辺境の村の出の俺に、デナーシェの王女！

ラウルは、思わず笑い出しそうになった。

いいだろう。

デナーシェのへの復讐は決まった。

暗い炎を胸に、ラウルは和平に調印した。

国境まであと半刻、という小高い丘の上まできて、ラウルは馬を止めた。

日ごろの鬱憤を晴らすかのように馬を走らせてきたため、後続の警備兵はしばらく追いついてはこないだろう。

久しぶりの解放感に、腕を伸ばして伸びをする。

視線の先には、国境となる森が見える。

城壁の外。

デナーシェの東西を守るように広がるその森は、デナーシェでは“天使の森”と呼ばれていたが、他国からは“魔の森”と呼ばれていた。

一度足を踏み入れたら最後、他国のものは二度と生きてはでられないという、魔の森。

デナーシェの民だけが、その不思議の力を持って、自在に行き来できるという森。

デナーシェの民が持つ不思議の力は、魔の森をなんなく通過できるだけではない。

王族に至っては周囲の者を癒すことができるという。

切り落としたはずの腕が、王族が手をかざしただけで生えてきたとか、瀕死の者を生き返らせたとか、はたまた何代か前の王は首を切られても自分の首をかかえて悠然と歩いたともいわれている。

そのほとんどは作り話だとしても、なんらかの力はあるのだろう。自分の目で見えたものしか信じないことにしているラウルだったが、デナーシェの民の力だけは信じている。

いや、信じざるを得ない出来事があったのだ。

時は戦時中に遡る。

『……っ痛っ……』

放たれた矢が腕をかすめる。

いつのまにか隊と引き離されラウルは、一人でこの地を駆けていた。このままではやられる。

敵の手に落ちるか、魔の森へと逃げ込むか。

二者択一をせまられて、ラウルは躊躇なく後者を選んだ。

少しでも生き残れる方を選ぶのが、戦乱の世を生き延び学んだことの一つである。

生きていればなんとかなる。

何かの気配を感じたのか、森に入るのを馬は嫌がった。

鬱蒼と茂る森の中は、馬で進むには適さない。

また、馬を逃がせば敵の目をそらせるかもしれない。

そう考えたラウルは、痛む腕を押さえながら鞍に枝を括り付け、上着をかけてあたかも人が馬の背にもたれかかっているように見せかけた上で、馬の尻を叩いた。

甲高いいなきと共に、馬は猛然と駆けだす。

『すまないな。生きて帰れば、墓くらい作ってやれるかもしれない』

木陰に体を滑り込ませ、辺りをうかがう。

しばらくして追手が馬の逃げた方へ向かうのが見えた。

とりあえずはごまかせたといえよう。

しかし安心するのはまだ早い。

空馬だとばれるのは時間の問題だ。

助けがすぐにくるともかぎらない。

少しでも身を隠す場所を探して、ラウルは森の奥へと足を踏み入れた。

『誰だ！』

近くに人の気配を感じて、反射的に剣を引き抜いて払った。

『わ……！』

浅かったか。

布を切った感触はあったが、倒してはいない。

ラウルは、かすむ目を細めてなんとか相手を見ようとする。
かなり血が流れたらしく、頭が朦朧とする。

『あの……あなた、ひどいけがをしてるんだ。

大丈夫、ここは天使の森。

私はあなたの手当てをしていただけだ』

天使の森。

ここをそう呼ぶということは憎つくきデナーシェの民か。

どれくらいの時はわからないが、ラウルは気を失っていたらしい
でなければ腕や頭に布を巻かれ、今まで気付かないわけがない。

不覚……！

もしこれが敵の手のものだったら、首をとられていた。

まだラウルの手握られたままの剣をちらちらと気にしつつも、声
の主は薬草を足に巻き付け布で押さえていく。

『本当にひどいけが……。一体どうして……』

どうしてもこうしてもない。
苛々とした気分で、ラウルは胸の中で毒づく。

戦争のないお幸せな国の民には、命がけで戦う俺たちの気持ちなんてわかるわけもないだろう。

祖母も友人も失い、頼る国もなく、敵は容赦なく切り捨て、泥水をすすって生き延びてきた。

俺の元に来る輩をまとめあげ、ティエリーやアディと共に国を作った。

今はその生まれて間もない国を守るために戦っている。

巨大な国となったのはいいが、大きくなれば大きくなるほど、わきが甘くなり、目が行き届かなくなる。

今回もそんな火種を消しに出張ってきて、このざまだった。

ラウルの心中など知るよしもなく、手当は進んで行く。

一通り毒を吐いて気が済んだラウルは、水筒の水で傷を清めている人物の観察を始めた。

ふわふわと揺れる髪は栗色。

背中側で一つにまとめ、細い紐でしばっている。

皮の手甲に胸当て。背には弓矢。

獵師の子だろうか。

ふと子どもの二の腕に、血がにじんでいるのが見えた。

さっきラウルが切りつけたところだろう。

人の手当てよりも自分の腕を先にすればいいのに……。

そんなことに思いあたり、警戒していた心がふっと軽くなった。
あきらかに兵士ではない子どもに、罪はない。

『うん。』

緊張していると効くものも効かなくなるからさ。

ここにあなたを害するものはないよ。

ゆっくり休んで』

気を緩めた瞬間、花の香りが鼻先をくすぐった。

鳥の声が聞こえ、森を抜けたさわやかな風が髪をなでる。

ここは天国か……。

いや、そうか、“天使の森”だったな……。

柔らかな陽光を頬に受け、ラウルは再び意識を手放した

ぱしゃん……

水音に、のどの渴きを覚えた。

眠っていたのか気絶していたのかさだかではないが、体を休めたおかげで頭はすっきりした。

ラウルは、剣を杖がわりに体を起こす。

自分の体をあらためて見ると、いたるところに布がまかれ、ぐるぐる巻きになっている。

縛り方は、どうも器用とはいえないようだ。

それでも、腹と背の矢傷は、そのままにしていたら確実に致命傷だった。

先ほどの子どもはどこにいったのか。

立ち上がろうと、ぐっと足に力を入れたら、布に血がにじんだ。

……まだ無理はいけない。

それでも喉の渴きをつるおしたくて、這うように水音のする方へ向かった。

ぱしゃん、ぱしゃ……

泉は、すぐ近くにあつた。

さほど大きくはない泉の中央で、栗色のふわふわが動いている。

『おい』

そういえば名前を知らなかった。
とりあえず呼びかけてみる。

『……！』

水浴びをしていた人物は、びっくりしたように振り向いて、ぱしゃ
ばしゃと音を立てながら、慌ててラウルの方に寄ってきた。

『動いちゃだめ！』

焦っている理由は、ラウルを心配したものだつた。

それとは別の理由で、ラウルも焦る。

『おまえ……女か……！』

『え……わ……あわわ……』

先ほど服と胸当てで隠れていた場所にはわずかなふくらみ。
ずいぶんとささやかだが、腰の細さといい、男とは違う。

『やだ……あっちむいて！
そこの服とって！！』

なんだか難しいことを要求された。

ラウルは、前者をきれいに無視して服を渡してやる。

『あっちむいてって言うてるのに！！』

『あっちを向きながらどうやって服を渡すんだ』

当然のことを言われた子どもは、『うう』とうなりながらもさっと服を奪い取った。

そして濡れるのもかまわずに羽織る。

『心配しなくても、子どもに興味はない。
それより水をくれないか』

見たところ、12、3歳といったところか。
すらりと伸びた手足が子鹿のようだ。
ラウルが泉で顔を洗っているうちに、子どもはどこからか水をたっぷり入れた水筒を持ってきた。

『奥の岩場から湧き出てるんだ。

この水を飲むと10年寿命が延びるといわれてる』

傷もこの水で洗ったから、きっとすぐ元気になるよ、と無邪気に笑う。

『……痛っ』

子どもが、水筒を差し出そうとして急に顔をしかめた。
左腕を押さえる。

『さっき俺が切ったところか。すまなかった』

『うっん、大丈夫』

腰にぶら下げた鞆から乾燥させた薬草を取り出す。

泉の水に浸して軽くもんでから、袖をまくって傷口に塗りつけた。
右手と口を使って布を巻きつけようとするが、なかなかうまくいかない。

やはりこの子ども、かなり不器用である。

『貸せ。やってやる』

ラウルは、自分の傷も痛むが、なんとも見ていらなくて手をだした。

子どもと違い、手際よく布を巻いていく。

『ありがとう。上手だね』

素直に感心する声に、なんだか背中がむずむずした。

『おまえが下手すぎるんだ』

だからついそんな言葉が出た。

すると、ふわふわの子どもは、むっとすねたように唇をつきだし、横を向いてしまった。

幼い動作が笑いを誘う。

『……くっ……はは、ははははは』

ラウルがたまらず声をあげて笑う。

腹の傷にひびくが、一端笑い出したら止まらなくなってしまった。
こんなに笑ったのはしばらくぶりだ。

『な、なんだよ。そんなに笑うことないだろ！

ちよっと……おいったら……！』

からかわれたのがわかったのが、子どもは真っ赤になって怒っている。

栗色のふわふわと相まって、毛長の子猫が一生懸命自己主張しているようになんとも愛らしい。

『いや、すまない。……くっ。くく……。』

おまえは命の恩人だ。

今は何の礼もできないが、落ち着いたらオーレリアの城に来てくれないか。

俺の名はラ……』

『ちよっとまって』

名乗ろうとしたのを、子どもは止めた。

『ごめん、気持ちはうれしいけど、私は傷ついたあなたをほっとけなくて手当てしただけ。』

デナーシエの民なら誰でもこうするよ。

でも、名を聞いてしまったら、私はあなたの味方をしたことになっってしまう。

それはとってもまずいんだ』

そうだ、とラウルはたと気づく。

ここは魔の森で、子どもはあのデナーシエの民だった。

戦争の間ずっと中立を貫き、どこの国にも敵対しないかわりに、どこの国の味方もしていない。

たとえ隣国の難民が助けを求めて城門をたたいても、すべて無視を貫いている。

ラウルの胸に、苦い思いが広がる。

あるとき門があいていたら。

せめて物資を塙の外にいる者にも分け与えてくれていたなら、おばあは死なずにすんだかもしれない。

急に押し黙ったラウルを見つめ、子どもは心底困った顔をする。

こいつに憎しみをぶつけても、何も解決しない。

胸の内の激動を深呼吸で鎮め、かつて村の子どもにしたように、ラウルは子どもの頭をぽんぽんと手の平でたたいた。

思ったとおり、ふわふわの、なんとも言えない良い撫で心地だった。

『あやまらなくていい。』

おまえの事情もあるのに勝手を言ったのは俺だ』

言いつつも頭を撫で続ける。

『うつん、ごめんね……って、いつまで撫で続けるのさ』

微笑笑の後の呆れ顔。

ラウルはまたひとしきり大笑いをし、再びすねた子猫をなだめるところになった。

ピューイイイイ

遠くで仲間の指笛が聞こえる。

ラウルがもう戻らねばと言うと、子どもはぶんぶん怒りながらも、水筒と、なんと馬を貸してくれた。

『この子はアルノー。』

とても利口な子だよ。

この子がいれば、天使の森で迷うことはない。

森の出口で離してくれれば、勝手に私の元に戻ってくるから』

ほどよい筋肉がついた、小柄な脚の太い馬だった。

これなら深い森や、多少の岩場も大丈夫そうだった。

ラウルはデナーシェの子どもに礼を言い、くしゃりと頭を撫でた。やはり良い撫で心地だ。

『無理しないでね』

そういつて子どもは、ふわっと微笑んだ。

ふわふわの髪そのもののような、柔らかい笑みだった。

森を抜け、仲間と合流するかしないかといったところでまた敵襲があり、ラウルは借りた馬にまたがったまま戦うことになった。

決して速くはないが、この馬が利口だというのは本場で、怪我をしていた彼をうまく助けて走った。

ふわふわの子どもに手当してもらった傷は、城に戻るころにはすっかりよくなっていた。

致命傷とさえ思った腹と背の傷でさえ、ほとんどふさがっていた。デナーシェの民の不思議の力は本当にあったのだ。

それとも『10年寿命が延びる』と子どもが言っていた、あの湧き水のおかげか。

戦争が終わり、平和が訪れてからも、アルノーは城の厩舎にいる。

ラウルは、落ち着いたら魔の森……いや天使の森の近くで離してやるうと思っていたが、あの夢のようだった泉の一時を手の内に置いておきたいような気がして、手放せずにいる。

小高い丘から天使の森を見下ろし、思い出に浸っていると、後方から呼び声がした。

「ラウル様　！」

警備兵が、ようやく追い付いてきたようだ。

まさか俺がデナーシェの王女と結婚することになるとは思わなかったな。

さてどんな態度をとってやろうか。

あの森とは違う、暗い笑みが口の端に浮かぶ。

たった一人、好感を持てる民に会ったからといって、デナーシェに対する憎しみは消えない。

この苦しみを、いつか忘れられる日がくるのだろうか。

必死の形相でこちらに向かってくる兵士たちを振り返り、ラウルは一つ溜息をついてから、また「面倒くせえな……」とつぶやいた。

5 国境での出会い

「リュシエンヌ様、もうすぐですわね」

王女と共に馬車に乗るユリアが、嬉しそうに言う。
国境のある街道を進んで三日目。
そろそろ腰が痛くなってきたところである。

前方に騎馬隊が見えた。馬車が止まる。
リュシエンヌは、窓越しに会釈をしてきた自国の警備兵に手を振って、別れを告げた。

続いてオーレリアの警備隊長に挨拶をしようと外をうかがうと、馬から降りた警備兵たちが、王女たちの乗る馬車のほうではなく、しきりに斜め前方を気にしていることに気付いた。
整然と並ぶ兵たちの列が、前方から徐々に乱れていく。

「王！ おやめください！
いくらなんでも失礼ですよっ」

どよめきの中、するどい声がとんだ。
何事かとユリアが窓から様子を見ようとした途端、乱暴に扉が開けられた。

とっさに王女をかばおうとした侍女は、難なく押しのけられ車内に尻餅をつくことになる。

「よお。おまえがデナーシエの王女か。
俺がオーレリアの王、ラウル〃オーレリアだ」

力に満ちた声。
がっしりした肩。
強い光を秘めた瞳。
黒い軍服に身を包んだ男が、そこにいた。

「……………」

リュシエンヌが慌てて口元を扇で隠すのと、王と名乗った男が後ろから引つ張られて別の男と入れ替わるのは、ほぼ同時だった。

「こんの、馬鹿野郎！ そんな挨拶がありますか！

リュシエンヌ王女、大変申し訳ありません！

わたくし

私、オーレリアにて宰相を務めさせていただいております、ティ

エリーと申します」

「……………初めまして。

デナーシエの第一王女、リュシエンヌです」

内心の驚きをひた隠し、リュシエンヌは平静を装って入れ替わった男に名乗る。

浅葱色の長衣をまとった男は、長い髪を後ろで結わえ、丸眼鏡をかけていた。

この男が宰相か。

若いな、とリュシエンヌは思った。

そして、さっきの人。

あれはもしかして。

「……………ってください」

「え？」

「リュシエンヌ様、下がってください！」

「あつ」

振り返れば、鬼の形相のユリアがいた。

リュシエンヌは、侍女の迫力に押され、馬車の中に追いやられる。オーレリアの宰相もまた、馬車から一步身を引き、跪いて礼をとった。

ユリアは馬車から彼を見下ろすと、歴戦の騎士も震えあがるのではという剣幕で怒鳴りつけた。

「ティエリー様、でしたっけ。これがオーレリアのやり方ですか？
このお方をどなたと心得ます！」

大陸一の歴史ある大国、デナーシェの第一王女、リュシエンヌ様にあらせられますよ！

！
即刻デナーシェの警備隊を呼び戻してください。婚儀は白紙です」

「侍女殿、お待ちください！」

「このような侮辱、たとえ王女様のご夫君になられる方であっても、許されることはありません！」

国に戻り、国王陛下にご報告させていただきます！」

「ユリア、別に私は……」

リュシエンヌは、ユリアを落ち着かせようと肩に手を添えると、跪く宰相の隣で、腕組みをして冷えた視線を向けるラウルに気付いた。

「お願い、ユリア、落ち着いて」

「リュシエンヌ様は黙っててください！」

「ユリア」

「じゃあ、また戦争だな」

「！」

静かに言い放った王に、その場にいた面々が注目する。

「俺はいいぜ。」

デナーシエに攻め込んで、平和ボケしたおまえのこの兄貴の首をとるまでだ。

それでもいいか、侍女さんよ」

馬鹿、何を言ってるんだと地に膝をついた宰相は男の足をひっぱるが、そんなことは気にしないようだ。

ユリアは不遜な男の視線を正面から受け、指が白くなるほど拳を握って肩を震わせた。

「あなた様という方は……！」

「ユリア、もういいわ。代わってちょうだい」

「リュシエンヌ様っ」

リュシエンヌはくやしさに涙をにじませる侍女を下がらせ自ら馬車

を降りると、オーレリア国王の前でドレスの両端を持って深々と礼をした。

「申し訳ありません。」

王自らおいでいただけたとは思いませんでしたので、突然のことに侍女が取り乱しました。

デナーシエの第一王女、リュシエンヌにございます。

陛下、そしてオーレリアの方々、お迎えありがとうございます」

顔をあげ、ゆつたりと辺りを見回して微笑む。

最後に視線を男に合せて、再度礼をした。

間違いない。

彼は、あの時出会った男だ。^{ひと}

男の言葉を待ちながらも、リュシエンヌの胸に懐かしさが広がる。

数年前、森で狩りをしていたときに出会った、傷だらけの騎士。

もう一度会いたいと思っていた。

手負いの獣のようだった彼を、とにかく手当てをし、愛馬を貸して

逃がしたが、そのあとどうなったかずっと気になっていた。

愛馬^{アルノー}が戻らなかったことで、敵の手に堕ちて死んでしまったかと思っていた。

でももしかしたら、生き延びて彼のもとでアルノーが飼われていたらしいと、淡い期待をしていた。

その彼が、目の前にいる。

しかも、自分の結婚相手として。

リュシエンヌはつい喜びをあらわにしそうになって、慌ててとどまった。

ここで、自分があの子の子どもだとわかってしまったら、姉の身

代わりができなくなってしまうからだ。

「ふん。」

この程度のことでは動じないか。さすがはお偉い王女様だ」

「……！」

喜びに震えていたリュシエンヌの胸が、一瞬のうちに凍りついた。言われた言葉よりも、その声音があまりにも冷たかった。

「礼儀もなくでもない新興国なもんでな。

お上品な王女様には合わないこともあるだろうが、あきらめてくれ。

ティエリー、あとはまかせた。俺は執務に戻る」

男は黒いマントをひるがえすと、馬に飛び乗り駆けて行ってしまった。

「ちよっ……王！？」

残されたのは、婚礼用に優美に飾られた馬車とあっけにとられるオーレリア勢。

呆然とたたずむリュシエンヌと、手巾で涙をぬぐうユリアだった。

「なんっ……なんなんですか、あの方はッ」

荷ほどきが終わり、二人きりになると、ユリアは地団駄を踏みながら叫んだ。

国境からオーレエリア城までは、馬車でも一日の距離だった。

王妃のために用意されたという部屋は、上質の調度品で埋め尽くされ、細やかな心配りのできる使用人がついていた。

今日からここでリュシエンヌは暮らしていく。

国境で出会った王の態度から、自分は歓迎されていないのかと思ったりリュシエンヌだったが、それは違った。

ティエリーはじめ、オーレリアの人々は温かく迎えてくれて、身一つで来ても何の不自由もなかった。

「私、何か嫌われるような態度でもとったのかな」

「そんなことはありませんよ！ リュシエンヌ様は立派でした！

あいつが失礼なんですよ」

「あいつって、あのね……」。

まあ、いいよ、嫌われてるなら顔を合わせることも少ないでしょ。

ここの生活に慣れるまでは、私もどんなボ口を出すかわからないから、都合がいい」

「そうですわねえ。もしかしたら、次にお会いするのはお式の時かもしれませんわね」

ユリアは、冗談で言ったつもりだった。

しかし、王は本当に一度たりともリュシエンヌの部屋を訪れることはなかった。

結婚式当日。

衣装合わせをしたり、式の作法を教わったりしているうちに、あっという間にその日が来た。

「お腰を締めますので、そちらの柱につかまってらしてください」

「はい」

ユリアと部屋付きの侍女の手により、婚礼衣装を身に付ける。

デナーシェのドレスはゆったりした古風な意匠^{デザイン}のだが、ここ、オーレリアは違う。

肩を出して胸を強調し、腰はコルセットで細く締め、スカートを大きく膨らませるための腰当^{クリノリン}をつける。

「こちらの腕輪はどういたしますか」

侍女が手の平で指示したのは、左腕につけた守護の腕輪^{プロテクター}。

金細工に宝石がちりばめられており、デナーシェの古い文字で心身の健康と大いなる幸福を願う言葉が刻まれている。

「これは大事なものだから、つけたままでもいいかしら」

「はい。見事なお品で、王妃様のお美しさを引き立てると思います。ベールに引つかかるということもなさそうですし、大丈夫です」

「ありがとう」

リュシエン又は、侍女の一人一人にもきちんと礼を言う。

使用人だからといって、ぞんざいに扱うことはない。

生まれは違えど、彼らも一個の人間であり、職務を全うしようと努力する姿に敬意を払うべきだと思うからだ。

また、そう言った態度を姉ならとるだろうと考えるからでもある。

誇りを持って、勤めを果たす。

たとえ、どんなに相手がこちらに背を向けようとも

結婚式が行われた神殿は、オーレリア城の敷地内にあった。

国境での出会い以来顔を合わせていなかった男は、はじめにちらりと視線を寄越しただけで、その後は妻となった彼女を見ることはなかった。

リュシエンヌも、式の段取りを間違えないようにするので精一杯だったし、披露宴では各国の使者からの祝辞を受けるのに忙しくて、夫の顔を正面から見ることはなかった。

そして、結婚式の夜。

リュシエンヌは、ごてごてとした飾りのついた夜着を着せられて、自室で控えていた。

月はどうに中天にあがり、もはや今夜の王の来訪はないものかと思ったそのとき。

蠟燭の火がほのかに揺れ、扉が開いた。

「陛下……。お待ちしておりました」

リュシエンヌは寝台から立ち上がり、男を迎える。

結婚式でも変わらなかった真っ黒な衣装は、闇に溶けて彼を恐ろしいもののように感じさせた。

男が近付いて来る。

強い酒の匂いが鼻をついた。

「大分……召されたようですね」

「ああ。こんなこと、正気で行けるか」

「……」

男がリュシエンヌの肩を押し、寝台に横たえる。
裾を割って、男の手が太ももをなぞった。

リュシエンヌはぞくりと震える体を押さえるように、きつくシーツをつかむ。

「おまえ、恋人がいたんだろ。マルスとかいう」

「！」

「そいつとはやったのか」

「あ、な、何、をでございましょうか、陛下」

「何をじゃねえよ。」

まさか腹にそいつの子どもなんかないだろうな

「私は……違います」

「何が違っているんだ。まあ、してみればわかることだな。」

おまえはどうして嫁^こに来た？
兄貴に言われたのか？」

「いえ、私の意志でまいりましたわ」

「ふっ……。そうか。」

国のために恋人を捨てて？

感心するよ。生粋の王族ってのは偉いね。

遊ばれて捨てられた男は今頃どうしてるんだ。

おまえたちには、人の情というものがないのか？」

リュシエンヌの体をまさぐりながら言葉を紡ぐ男の表情は、どこまでも暗い。

何が彼を変えてしまったのか、とリュシエンヌは戸惑う。

あの森で会ったときには、こんな顔をする人ではなかったと思うのに。

明るい声で笑う、夏の日差しのような人だと思ったのに。

私の、せいなのだろうか

リュシエンヌが自分の物思いに沈みこんで言葉を返さなかったのをどうとったのか、男はそれ以上問いかけてくることはなく、事務的にことを進めた。

ユリアが用意した香油は、多少滑りをよくはしてくれたが、痛みを完全に取り除いてくれるものではなかった。

破瓜の血が、股を伝う。

「初めてか。デナーシェの王も酷なことをする」

涙に頬を濡らしながら、リュシエンヌが見たのは悲しげな青い瞳。軽蔑以外の色を初めて浮かべた男は、しかしリュシエンヌを温めてくれることはなく、身辺の始末をすると、すぐに扉の外へと消えて行った。

「う……ふっ……く……」

扉が閉まった途端、一時は堪えていたものが、一気にあふれてきた。枕に顔を伏せて声を殺し、リュシエンヌは引き裂かれた痛みに耐える。

なぜこんな扱いを受けるのか。

政略結婚とはいえ、妻として迎えられたなら、それなりの愛情は持ってもらえると思っていた。

姉だったら違ったのか。

美しい姉。

愛する人を見つけた姉。

身代わりを申し出たのは、姉の役に立ちたかったからだが、もしかすると、自分も姉のように愛し愛される人を得られるかもしれないという思いがあったのかもしれない。

騙そうなんて、思ったのが悪かったの？

答えをくれる者などいるはずもなく、空が白み始めるまでリュシエンヌの嗚咽は続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9127z/>

身代わり王女の恋物語（なろう版）

2012年1月5日19時49分発行